

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

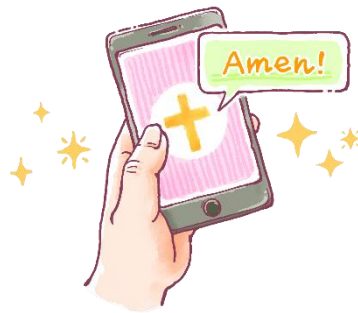
第11章 祈りについてのパウロ その1②



聖霊による祈り

祈りにおける霊的戦い

祈りに答えられないときの慰め



聖霊による祈り

キリストの御体に指示を与えるに際してパウロが意図していたことは、個々人が霊において（in the spirit）祈る際に秩序をもたらし、自発的な表現を目指すところにありました。これらの指示は、注意深く従うならば、ペンテコステ的な祈りと礼拝とが、無秩序に陥るところから守ってくれることでしょう。

こういうわけですから、異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。（I コリント 14:13-17）

パウロの一番の関心事は、キリストの御体の徳を高めることであり、どうすればそれが最善の形で成し遂げられるかにあります。文脈を見ると、コリントの会衆の中で豊かに現れていた異言の賜物が、神の意図しておられた目的にそぐわないものになっていたことが明かです。異言が前面的かつ中心的なものとなってしまうのです。異言が単にドラマとして、見世物として語られ、キリストの御体の建徳ということは軽視されてしまっていたのです。解決するにはどうすればよかったのでしょうか。それは、祈ることでした。「それを解き明かすことができるように祈りなさい」ということだったのです。語られた異言は解釈されることで初めて、キリストの御体の徳を高めることができるのです。クリスチャンには、解釈の賜物も与えられています。ですから、会衆の前で異言を語ったり、異言で祈ったりする人は、それを解釈することができるようにも祈るべきなのです。

14節では、パウロは引き続き、異言で祈られたことを解釈することの重要性について語り、「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、[著者注：解釈の賜物がなければ] 私の知性は実を結ばないのです」と説明しています。

これには、自然な問いとして「ではどうすればよいのでしょうか。」(15節)という問いが続きます。すなわち、クリスチャンたちの集まりにおいて異言で祈る者として、自分は何をすべきかということです。答えが続きます。「私は霊において[著者注：すなわち、異言によって] 祈り、また知性においても祈りましょう」。パウロは「私は、聖霊が言葉を与えてくださるがままに、異言で超自然的に祈り、私自身の精神と思考によっても祈ります」と語っているのでしょうか。「解き明かすことができるように」という、祈りについてのここまでの教えに照らし合わせてみると、パウロがここで語っているのは、「私は異言によって祈り、キリストの御体の徳が高められるよう、祈ったことを解釈する」ということであるように思われます。同じ実践は、霊の歌にも適用されています。「私は、霊においても祈り、他の人々の益となるように自分が歌うことの解釈もします」。

16節は、これに封印をしています。パウロの指示は次のように言い換えられるかもしれません。「これらの、公的な集会で異言で祈ったり歌ったりしたことは解釈せよと要求する手引きに従えないなら、語られたことが理解できない人々は、どのように『アーメン』と言って徳が高められるのか」。徳が高められるという限り、ここで、異言で祈り、歌うと言われていることには、神に讃美と感謝を捧げることも含まれるでしょう。それゆえ、神に異言で讃美と感謝を捧げる人が、解釈が与えられるようにと事前に祈り、かつ、異言を語るごとに解釈を述べるのであれば、キリストの御体全体が、「あなたの感謝について、…アーメンと」(14:16) 言えるようになるのであり、徳が高められるのです。

祈りと讃美を、賛意を表す「アーメン」という言葉で確認する習慣は、キリスト教と同様、ユダヤ教の礼拝でも聞かれたものでした。初代教会の礼拝風景をその目で見ている人々の中には、「アーメン」という大声での唱和を、遠雷の響きになぞらえている人もいます。会衆で唱和する「アーメン」の声は、祈りそのものに優るとも劣らず重要なものとみなされていたのです(黙示録 5:13-14, 22:20)。

公の祈りは、一人の人が会衆の中で行う祈り以上のものであるべきです。初代教会における「アーメン」は、人々が自分たちを、祈っている人と一体化させる応答であり、語られたことに賛意を示し、その祈りを自らのものとして適用するものでした。したがって、ある人が祈りに導かれると、共同体の全員が祈りに唱和していくにつれて、ほとんど共同体全体の祈りとなるのでした。これは、彼らがキリストの御体として、主に、共同体とし

て近づいていることを示すものだったからです。

祈りにおける霊的戦い

私たちは霊的な格闘の中にあります。私たちはこのことを理解しなければなりません。というのも、敵に対するこの戦いに肉の力で勝とうとすることは、敗北につながるものだからです。私たちはペテロに対する主のお言葉を覚えているべきです。「**誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです**」(マルコ 14:38)。「肉体」(ギリシア語:サルクス)は地上での命を暗にほめかしています。私たちの戦いは、地上の戦場で戦われるものではなく、地上の武器で戦われるものでもありません。私たちの戦いは、異なる種類の武器—神の御力によって効果的なものとされる武器を用いて戦われるものなのです。

私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、……(II コリント 10:3-5)

クリスチャンの武器は数が多く(エペソ 6:14-17 参照)、祈りはそこに列挙されていませんが、祈りは少なくとも、それによって武器が身にまといられるための手段なのです(エペソ 6:18 参照)。(形而上学や人間の哲学、思考上の操作などの人間的に過ぎない手段によってではなく)祈りから得られる力によって、種々の議論や主張は、神の知識に対するあらゆる高次の反対、強力な反対のごとく、崩されるのです。福音に反対する議論には、空想と、単なる人間的な考え方が含まれています。祈りと神のみことばを学ぶことにより、聖霊が、それらの議論を崩すための知恵を与えてくださるのです。

「すべてのはかりごとをとりこにして」(10:5)。キリストを信じる者の戦いには、自分の思考の歩みを、丸ごとキリストのみこころに一致させるということが含まれます。精神そのものが戦場だからです。私たちの汚れた思いのいくらかは、自らの内から生まれてくるものですが、サタンによって植えつけられるものもあり、環境に影響されるものもあります。それゆえ私たちは、自分自身の罪深い性質と格闘し、活発に迫り来る悪の勢力とも格闘するのです。そして、むしろキリストの思いが自分の内に宿ってくださることを求めつつ(ピリピ 2:5,4:8)、邪悪で有害な思いには断固として抵抗していかなければなりません。サタンの誘惑には断固としてノーと言いつつ、自分を惑わすものを乗り越えていくのです(テトス 2:11-12)。

祈りが答えられないときの慰め

私たちが祈るとき、神は常に私たちをいやし、苦難から助け出してく下さるでしょうか。人を動揺させるこの問いは、折に触れてクリスチャンの心に浮かんできます。私たちは、良い答えを願っているながらも取り去られなかったパウロの肉のとげ(II コリント 12:7)のような事例に直面します。イエスのいやしの働きが、少数の例外を除き、罪人や不敬虔な人々に向けられていたことは注目に値します。初代教会の働きでも同じでした。そして、クリスチャンが対象の場合には、キリストの贖いによって確かに与えられるものであるとはいえ、いやしが、

すぐに起こるものではなかった例がいくつかありました（Ⅰコリント 11:30, Ⅰテモテ 5:23, Ⅱテモテ 4:20 参照）。その中には理由が与えられている例もありますが、別の例では、推測することしかできません。パウロは自分の弱さがいやされずに留まっていたことについて、理由を語っています。

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。（Ⅱコリント 12:7-10）

コリントの会衆においては、虚弱、病気、死が多く見られたようですが、これについては「みからだをわきまえない」（Ⅰコリント 11:29）と、理由が語られています。神は、問題の矯正のために、虚弱や病気、死をお許しになっておられたのです。問題が取り扱われるまでは、いやしを得ようといかなる努力をしても実らないように思われます。神にとって、そのような状況でいやしを行うというのは、ご自身を、子どもに必要な人格が形成される以前にしつけを止めてしまう親のようにしてしまったことでしょう。

パウロの厄介な問題の本質については、不確かな点が多くあります。ある人々は何か肉体的な疾患、厄介な目の問題か、繰り返し流行するマラリアのようなものではないかと考えています。

あるいは、「**私を打つための、サタンの使いです**」（12:7）という言葉から推測して、厳密に霊的な事柄だったと想定する人々もいます。また、パウロの周りにつきまとして問題を起こしていたのは、一人のユダヤ主義者だったと言う人もいます（民数記 33:55 では、「目のとげとなり、わき腹のいばら」となるのは人です）。ただし、私的な解釈を施そうとしても、あまり得るところはありません。当の問題が何であったにせよ、パウロはそれが除かれるように三回祈りました。切に祈ると答えがありました。それは彼が切に願っていた「いやし」ではなく、自分の苦しみの理由に対する理解でした（12:7 参照）。彼は、置かれた状況がしつこくも残ることが、自分にとって最善のことだということを学んだのです。同時に、神は彼に、それに耐えられるだけの恵みを与えるという約束をされたのでした（12:9）。

今日のクリスチャンへの教訓としては、病気や苦難に襲われる時には神に切にいやしを求めるべきですが、肉体のいやしよりさらに重要なのは霊的な状態だということもまた、心に留めておくべきです。繰り返し求めてもいやしを与えられないように思われるなら、パウロの体験を思い起こし、主ご自身からの理解をいただけるよう心を開くべきです。そうすれば、神も、その知恵により、私たちに最適な形でお働きくださることでしょう。